

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

歴史の中のイタリア①

* 水と共生してきた都市ヴェネツィア *

徳橋 曜

イタリアの主要な都市には、いずれも長い歴史の重みを感じられる。古代、中世、近代、現代という時間の流れの中で造られ、残され、あるいは壊されてきた、その結果が我々の目にしている現代の都市の姿である。我々は時代ごとの文化や理念、政治、社会のあり方をそこに見出せる。歴史学の視点でイタリアを見ようというこの連載の第1回では、ヴェネツィアを取り上げよう。

アドリア海の最奥部に位置するヴェネツィアは、イタリアで最も有名な観光都市の一つであろう。近年は著しいオーバーツーリズムでも話題になっている。ヴェネツィアに文字通り観光客が溢れるのは、この都市が小さな島(リアルト島とジュデツカ島)にあって、周囲をラグーナ(潟)の水に囲まれているという地理的環境のせいでもある。水に囲まれているという環境は、この都市の歴史に際立った特徴を付してきた。ヴェネツィアの起源は不明であるが、遅くとも6世紀前半には漁業や製塩、海上交易を営む集落がラグーナに存在した。そして9世紀初頭、それまでの集落とは別の場所に小さな島々をつなぐ形で新たに都市が建設され、今に至るヴェネツィアの本島となった。当時の住民はラグーナの水底のさらに下の粘土と砂から成るカラント層に杭を打ち込み、その杭の断面に板材を何枚も打ち付けた上に石材を積んで建築の土台とした。この脆弱な地盤の上にヴェネツィア人は豪壮な居館や公的な建物、教会を建てていったのである。もっとも石造や煉瓦造の建物ば

かりが当初からあったわけではなく、木造建築物も少なくなかったらしい。現在は石造のリアルト橋もかつて木造であったことは、15世紀末のヴィットーレ・カルパッチョの絵画からも確認される。干拓・造成によってヴェネツィアは大きな二つの島からなるまとまりを形成し、1171年に市内は6つの行政区(セスティエーレ)に分けられた。以前の島と島の間に残った水路は運河となり、地区相互をつなぐ橋や道が造られ、広場も整備された。



【ヴェネツィア】

ヴェネツィア人にとって水は日常的な重要性を持っていた。道路や広場が整備されるなかで、広場に建物の正面を向けた居館が建つ一方、運河に面して正面を設けた建物も多く、特に都市の中央を貫く逆S字型の大運河はヴェネツィア随一の

「目抜き通り」であった。ヴェネツィア人の交通手段はすべて船で、現代では観光用であるゴンドラは元来、船頭付きの自家用船舶であった。そして何よりも、ラグーナの水環境は、都市の機能と防衛の上で重要であった。ラグーナは長い砂州によってアドリア海と隔てられ、砂州の数カ所に開いた切れ目(潟口)は外海との間の水の流動を確保すると共に、船舶の出入り口でもあった。ラグーナはヴェネツィアを外海につなぐと同時に外海の荒波から都市を守り、また外敵がヴェネツィアに近づくことを困難にしていたのである。一見すると一様な海面の下には深みと浅瀬があり、そこを安全に航行してリアルト島に到達する水路はヴェネツィア人だけが熟知していた。そのためアドリア海からの侵入だけでなく、本土からリアルト島への接近も同様に水によって隔てられていた。現在は本土のメストレからリアルト島まで一直線の長い橋が架かっているが、その元となる鉄道橋が19世紀半ばに架けられる(現在の形になるのは1933年)まで、本土からヴェネツィアへ渡るには、基本的に船以外の手段がなかったのである。従って潮流や河川が運ぶ土砂の堆積は、ラグーナにおける船舶航行の支障となりうるのみならず、ラグーナの陸地化によって本土からの外敵の接近が容易になるという懸念を招いた。



【ラグーナと砂州】

一方、運河が縦横に走る市内の環境も、運河の水質によって左右された。「運河」と言っても、前述のように元々は島と島間の水路である。その水路を介してラグーナの水は流れ、循環していた。それによって島内と周囲の水は自然に浄化さ

れ、泥の堆積も阻害されたと考えられる。建築工事や運河の無秩序な利用、底荷の投棄や廃船の放置によって、運河の流れが妨げられれば、水底に泥が堆積して水が淀み、悪臭も生じかねなかったから、水路の管理・浚渫は重要であった。1321年にヴェネツィアの議決機関の一つ、大評議会が水路の浚渫を決議した記録を見ると、「全市において、水路や水の淀む場所や運河のそばで空気のひどい汚れと健康被害が生じている。それらの場所は大部分が土砂で浅くなっており、非常な悪臭を生じ、特に夏季にひどい」との記述がある。当時、湿地帯で温帯性マラリアになりやすいという経験則から、腐敗した空気が伝染性の病気の原因であるという認識があり(無論、蚊を宿主とするマラリア原虫が真因であるが)、当時の人々からすれば、「空気のひどい汚れと健康被害」は悪臭の問題に止まらなかった。実際、河口付近では淡水化と堆積による陸地化が進むため、蚊の発生する環境ができやすかったと考えられている。

それゆえラグーナの水環境は、都市の存在に関わる重要事であり公共財であった。1282年にはジュディチ・ディ・ピオヴェゴ Giudici di Piovego という役職が設けられ、ラグーナや運河の水利、公道・橋の管理等を管轄するようになった。「ジュディチ」とは判事、「ピオヴェゴ」はラテン語の「プーブリクム」publicum(国有財産・公共物)に由来するヴェネツィアの俗語である(他の地域では「ピウヴィコ」piuvico となる)。この名称自体が、水環境が公共のもつと認識されていたことを示唆する。古代ローマ帝国に由来するローマ法概念では、川や海の水面は道路や橋と並んで、国家が所有し万民の自由な使用に供する公共物(レース・プーブリカ)とされた。地中海西部地域ではこの認識は中世前期に失われていくが、12世紀にローマ法が法的概念の基盤として復権し、公共物に関する認識も復活した。ヴェネツィアを含め、事実上の公権力として振る舞うようになった北・中部イタリアの自治都市は、道路や川、海の管理権を行使する正当性を主張するようになった。加えてヴェネツィアはそれ以前から、東方のビザンツ帝国(東ローマ帝国)とのつながりが相対的に強かったから、そちらからの影響もあったかもしれない。因みに飲料水確保も重要で、井戸を掘っても塩水

しか出ないヴェネツィアは、天水井戸と本土からの淡水の輸送に頼っていた。

こうして、ヴェネツィアを囲む水環境は都市の命運を左右するものと認識され、当局はしばしば住民の私的利益を制限してでもラグーナの保全に努めた。しかし、そのラグーナに土砂と淡水をもたらす河川の管理は容易ではなかった。15世紀初頭までのヴェネツィアは、ティロル伯領に隣接するトレヴィーゾを1337年に征服した以外、本土内陸部に支配領域を持たなかったから、他都市の領域にある河川を直接的に管理できなかったのである。だが、15世紀前半にヴェネツィアがヴェネト、フリウリ、ロンバルディア東部に領土を広げ、広大な本土領を支配するようになると、状況は変わった。ラグーナに影響を及ぼす本土河川の管理は、他都市との外交に関わるものではなく、領域支配の内政で対処できるものとなった。



【ヤコポ・デ・バルバリ作 ヴェネツィア景観図】

出典元: https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jacopo_de%27_Barbari_-_View_of_Venice_-_Google_Art_Project.jpg

この政府の関心が、1501年における水利行政局 *Magistrato alle Acque* の設置に反映された。同行政局は2年任期の3人の水利専門委員で構成され、「公的管轄下にある土地に建てられた建物・建造物を撤去し」、「公的な水面をごく一部でも埋め立てる行為を将来にわたって禁止し、違反には1000ドゥカーティ[ドゥカート金貨1000枚]の罰金を課す」ことを任務とした。さらにその4年後には水利管理委員会 *Collegio Solenne sopra le Acque* が設置され、当初は必要に応じた不定期の開催であったが、1578年以降は定期的に召集されるようになった。共和国元首たるドージェに直属するドージェ評議会や、国家機密に関わる十人評議会がこの委員会のメンバーに入っているところか

らも、水の管理が重視されていたことが判る。同委員会設置を定めた1505年の十人評議会の通達は、「この水という資源は極めて貴重でそして重要なものであって、端的に言うなら、それにこそ我が国家全体の存立がかかっている」と明言し、施策の公平性を確保するために「ラグーナに不動産その他を有するすべての貴族は、公益よりも自身の私的利益を優先する可能性があることに照らして、同委員会の構成員となることを不可とする」と定めている。公共性が強く意識されていることが察せられよう。

そして、政府は積極的に本土河川の流路変更や河口の移動を図り始めた。ヴェネツィアにとって特に重要であったのが、ブレンタ川である。現在のブレンタ川の主たる流路はラグーナを大きく迂回しているが、元々はリアルト島の近くに河口があった。この川の流域はパドヴァの支配下にあったが、1405年にパドヴァがヴェネツィアの支配下に入った後、ヴェネツィアはブレンタ川の流路を西方へ向ける計画を進め、16～17世紀初頭に新しい流路や運河の開削が続けられた。最終的にブレンタ川の河口はラグーナの外に移され、川が運ぶ土砂がラグーナを陸地化させるという懸念はなくなったのである。ブレンタ川以外にアディジェ川、バッキリオーネ川、シーレ川、ポー川でも、こうした工事は行われた。

水と都市の関わりは現代も続く。秋から冬になると高潮の発生が話題となるが、1980年代、海底に巨大な可動式防潮板を設け、高潮が予想される際にはこれを立てて、ラグーナへの潮の流入を防ぐ計画が立てられた。環境への影響をめぐる議論、費用の問題、さらに汚職事件もあって建設が遅れ、ようやく実動が始まったのは2020年である。ラグーナを公共財と捉えて保全し、水と共生してきた都市ヴェネツィア。その水環境保全の努力が、今のヴェネツィアを取り巻く風景を生み出したと言えよう。

(富山大学名誉教授)

* (6+4) + (2+1) で作った

新たな可能性*

山田 晃裕

円安ユーロ高が止まらない昨今。「イタリアが遠のいていく」という危機感は日に日に色濃くなり、経営者としては悩ましい日々が続く。逆風が吹いてばかりの日常にあって、私たちが手がけるイタリアツアーの見え方もここ 1~2 年で大きく変わってきた。実現可能性だけ見れば「高いハードル」であり、貫くべきアイデンティティとしては「捨てたくない希望」である。

例年どおり、ロヴェレート の ” Tomeo Internazionale “Città della Pace” から招待が届いたのは昨年夏の終わり。メールとは別に、2023 年のカムバックから窓口を務めてくれている女性スタッフ・Maria Vittoria さん(以下、マーヴィと記す)から、Whatsapp で 1 分半のオーディオメッセージが送られてきた。

正直なところ、円安と物価高のダブルパンチによる旅行代金の高騰、そして声がけ対象となる人数を見ても、これまでと同じく 13~14 人の子どもたちを日本から連れていくのが難しくなるのは前回大会の終わりから予想ができていた部分がある。「2026 年はいろいろ大変になる」と伝えていたのだが、彼らの熱い思いを聞いて気合が入った。簡単に諦めるわけにはいかない。まずは、自分たちなりの全力を尽くすことから始めようとなったわけだ。

★(6+4)が完成するまで

最初のハードルは航空券。2026 年の Pasqua は 4 月 5 日で、3 月末に出発するべく計画を立てるのだが、これまで慣れ親しんできた中東経由フライトは、(インバウンド需要の影響ゆえか)あり得ないほどの高額提示。2025 年 9 月に見積もりを取ったにも関わらずである。

普段からお世話になる旅行会社さんが熟慮の末に提示してくれたのが、シンガポール経由ミラノ行きフライト(往路は 7 時間・復路は 18 時間トランジット)だった。これ以外に選択肢がないという状

況で、旅のオーガナイズが始まった。

続いての課題は、クリスマス前から始まった渡航メンバーの確定。対象者の分母が多くはなかったのだが、予算を調整していく中で「最低 7 人で渡航すること」を目標とした。旅行代金が上がってしまう可能性を考慮しながらも、対話を重ねた末に最終的に参加を決めてくれたのは 6 人の教え子たち。シンプルに考えれば、あと 1 人足りていない状況ではあった。

10 人を上回らない可能性が濃くなった年明けから「プラン B」の準備を進めていく。ACミランアカデミーの同士で毎年同じ大会に参加しているクウェートアカデミーに、合同チームの結成を提案してみることに。紡いできた歴史の長さだけ見れば私たちの 1 年先輩にあたる彼らも、この大会の素晴らしさを知る同志で、ここ数年は年代別に合計 5 チームを派遣するほど注力している。一緒に「新たな可能性」を作り出そうと連携を深めていった。

イタリアとの時差は 8 時間、クウェートとの時差は 5 時間。世界を股にかけ三者間で協議を進める中で、合同チームを 2 つ作ることで合意し、これによりツアー催行を決定したのが 2 月中旬のこと。

しかし、期限ギリギリの 2 月 25 日に航空券を購入した 3 日後に、米国・イスラエルのイラン攻撃が始まってしまう。イランの報復攻撃により戦火は中東全土に拡大し、クウェートも即座に領空閉鎖を決断。状況の打開を願っていたが、最終的には渡航不可となってしまった。準備をする大変さは世界中どこであろうと同じ。子どもたちの笑顔のために準備をしてきた仲間の悔しさを背負って、私たちも渡航準備を進めることに。

状況だけを考慮すると、今回シンガポール経由フライトを選んでいたことが幸いし、運に恵まれた形ではある。とはいえ、渡伊するまで日が迫った状態で、人数が揃わないという状況に陥ったのも事実。出場する PULCINI カテゴリーは 7 人制、ルール上選手をレンタルすることが可能なのだが、ここからマーヴィが「地元クラブの子どもたちを巻き込んでみるわ」と本気を見せる。参加チーム向けの会議で熱弁を振るってくれて、最終的には 4 人の地元の子も子どもたちが助っ人としてジョインしてくれることが決まったのは、ロヴェレート入りした 4

月2日のことだった。

マーヴィと連携して、明るく4月3日午前顔合わせの機会をスタジアムで設ける。開幕前の準備に追われる中でスタッフたちが勢揃いで出迎えてくれただけでも胸がいっぱいなのだが、大会出場に向けて準備は進めなければならない。Simone, Michele, Braian, Joe という4人の仲間が加わり、(6+4)の日伊合同チームが誕生した。

自己紹介を終えた直後から、身振り手振りでどうにかしようとするイタリア人たちに対し、戸惑いを隠せない日本人たち。とはいえ、サッカーをしている限りは、向き合う課題も味わえる楽しさも同じ。打ち解けるまでに時間はかからなかった。

1時間半のトレーニングを終えた翌日には大会が開幕。土日合わせて合計5試合をプレーしたわけだが、取り組んできたプレースタイルに異なる部分も多いゆえ、チームとして機能するには時間を要したことは否めない。緊張しい日本人たちがから回りするシーンを何度も見だし、イタリア人たちも感情の上下動が激しくむらっ気たっぶり。どちらも「らしい」一面を存分に見せつけてくれたわけだが、「Vai Simo!! うんダイジョーブ！」みたいな感じで、日本語とイタリア語がぐちゃぐちゃになる中、よくもわるくも慌ただしい時間をピッチ脇で過ごすのはとても楽しかった。

指導者目線でいえば、意思疎通もスムーズにできない環境下でゴールを奪い、2勝できただけでも素晴らしい。Braian が凄まじい突破力を見せて攻撃を引っ張ったのだが、最後の試合で日本人も意地の1ゴールを決めた時には、もはや国籍なんて関係なくなっていた。「みんなで取ったゴールってのはこういうものなんだ」としみじみ思っていた。

これまでの当たり前は、日本人だけのチーム(かたまり)。同じ大会の同じピッチでプレーこそするが、イタリアのチームはあくまで他者だった。ところが、今回は”NOI”の中にイタリア人たちがいる。境界線がひとつ取っ払われるだけで、新たな刺激が生まれることを知った。

ちなみに、日伊合同チームで5試合を戦い終えた後にも、ボーナスマッチ2試合を戦うことに。明らかに異彩を放っていたようで、初めは警戒していた他チームの子どもたちが、「オレもジャッポネ

ージと一緒にプレーさせてよ」と何人も懇願してくる。大会公式記録にはまったく残らない試合で、さらに5人のイタリア人(もう名前すら覚えていない。笑)が助っ人として(勝手に)やってきたことをここに記しておく。

★(2+1)ができるまで

今年のツアーは、2人の日本人の若者と、1人のイタリアの女子高生に支えられ完走することができた。

ここで時計の針は2026年1月にまで遡る。場所は、名古屋のとある居酒屋。25歳になったかつての教え子とお酒を酌み交わす機会にめぐまれた夜である。

教え子の名はTakaya、職業はHIPHOPアーティスト。僕からすれば苦労と努力の末に「好きなことでメンが食えている」ってだけでも立派だと思える若者だ。SNS全盛の時代にあって、かつての教え子たちとつながりを維持したり再構築できたりするのが嬉しい時代でもある。Takayaと会うのもずいぶん久しぶりだったが、彼の口から「今の感性で、あの時旅したイタリアを見てみたいんですよ」という言葉が出てきた。

彼は2012年に私たちが初めてロヴェレートの地を踏み、大会に出場したチームのキャプテンを務めた教え子である。今でこそ全景を把握できている。

自己投資で渡伊してでも、これから先の人生に活かしたいんだという心意気には、思わず涙が出そうになった。折しも「7人いれば催行できる」と思って準備する最中。まさかその7人目が、プレーヤーでもない25歳の若者になるとは想像もしていなかった。

コーチではないが帯同を申し出たOBの1人。さらには、職業アーティストゆえ見た目も派手である。スポーツ面だけを見ればそもそも帯同を断ったり、見た目をどうにかしてくれみたいな言い方をする団体もあるかもしれない。

とはいえ、僕は何よりも彼のアイデンティティは尊重したかったので、「公式おにいさん」という設定で出発準備を進めることに。日本から渡航する6人の子どもたちとその親御さんには、きちんと面通しをして、初出場から14年の歳月をかけて作り上げた「サイクル」の重要性を理解していただい

た形だ。11 日間に及ぶ旅路を、おにいさんとして子どもたちと一緒に歩んでもらった。

Takaya の渡伊をマーヴィはじめ大会スタッフに伝え、そのストーリーに惚れ込んでくれた。サプライズでちょっとした「カムバックセレモニー」を模様してくれた。14 年前にトチってしまった選手宣誓のリベンジの機会を仕掛けたり、いろいろあった。とことん楽しみながら、できることを全てやり尽くしてくれた。このような形でカムバックを遂げて、新たな価値を生み出してくれたことには感謝しかない。

Takaya のみならず、学生期間を終えて社会に出てさまざまなフィールドで働く卒業生も増えてきた。そんな中、2024 年の高校卒業後にイタリアに渡り、働きながらサッカーを続けているのが Haku である。

ミラノで再会したのが 2024 年 12 月。昨年ツアーで初めて帯同して、パスクアをトレンティーノの地で一緒に過ごした。大会の雰囲気をとて気に入り、今年もロヴェレートまでやってきてくれた。根はシャイなのを昔から知っているが、1 年ぶりの再会でイタリア語はさらに上達し、子どもたちと仲良くなるスピードも早くなっている。かつての教え子たちの成長は、どこにいてもどんな形であっても嬉しいものだ。

Takaya と Haku が、私たちのもとでサッカーを学んでいたのは 10 年以上も前の話。学年も違うのでグラウンドでもすれ違っていた 2 人が、イタリアで出会うということにも不思議な縁を感じる。これもまたスポーツのチカラなんだと信じたい。

最後に紹介したいのは、今大会の日伊合同チームに帯同してくれた、ボランティアスタッフの Natalija (ナタリヤ) さん。地元の高校に通う 17 歳で、私たちのチームへの帯同を指名されたのは、3 月 31 日だったとのこと。わずか 3 日間で日本語を可能な限り勉強して、開幕前日のトレーニングでのファーストコンタクトの瞬間から、できる限り私や Haku の通訳を介さずに子どもたちに話しかけてくれる。帯同中も新たな言葉を学ぶたびに彼女のスマホのメモ帳は更新を続ける。17 歳の女子高生の努力の軌跡は、子どもたちの心の壁を確かに打ち破ってくれた。

この大会の素晴らしさは、彼女のみならずスタ

ッフの「気配り」にある。150 人を超える高校生ボランティアたちが担う業務は、試合運営やメディア対応、会場の安全管理など多岐にわたるが、主役である選手から見える部分も見えない部分も、弛まぬ献身によって支えられていることを忘れてはならない。



【言葉の壁を超えてワンチームになった 13 人】

彼らもまだまだ若く全員がしっかりコミットできるわけではないのだが、年に 1 度のこのイベントへの尽力を繰り返す中で、人間的な成長が見えてくる。点と点が線になっていく感覚を、親戚のおじさんの視点で味わえるのも魅力なのかもしれない。

私たちとともに過ごした 3 日間。最終日のセレモニーを終えた深夜のお別れの時に、彼女は 1 枚の絵を渡してくれた。「いつ描く暇があったんだ」と言いたくなるほど一緒に時間を過ごしていたのに、「夕食後に気合を入れて描いたのよ」と微笑む。日本語で「たくさんの幸せを願っています」と書かれており、これには子どもたちも感動を隠せなかった様子。2 人のおにいさんと 1 人のおねえさんがサポートのおかげで、今年のロヴェレートでの冒険も無事に終わりを告げた。

何事も単独突破が難しくなっていく昨今。イタリアを遠すぎる場所にしないための戦いは続く。続けることは簡単ではないが、私たちが手がける旅の価値を知る仲間が増えていけば、まだまだやれると信じている。

(AC ミランアカデミー愛知)